

●書学書道史学会

会報

第10号

平成17年(2005)10月1日発行

編集・発行

書学書道史学会
事務局東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)5489-7288(直)東洋学(アジア研究)連絡協議会の
発足について

大橋 修一

《会報》第7号で事務局から、日本学術会議法の一部改正に伴う日本学術会議の「登録学術研究団体」制度の廃止について、要点をお知らせ致しました。同会議に係るその後の経過については、以下のようになっておりますので、ここに概略をご報告致します。

まず、日本学術会議の組織改革に伴い、同会議会員の推薦制度が変更されたことから、これまでの推薦制度を担って来た「登録学術研究団体」認可制度と、この団体による「研究連絡委員会」(研連)も廃止されることとなり、本学会が属していた同会議第一部・東洋学研究連絡委員会(東洋学研連)も、二〇〇五年(平成十七)九月三十日をもって廃止されました。この廃止を契機に、これに代わる組織として結成されることになったのが、東洋学(アジア研究)連絡協議会です。そしてこの協議会は、二〇〇四年十二月十一日に設立大会を催し、発足致しました。会長に就任されたのは、大東文化

大学教授の池田知久氏です。その設立の趣意は、東洋(アジア)の古代から現代に至る諸文化について、各種各様の学問分野を展開して研究する東洋学(アジア研究)に関する各学・協会が、斯学の一層の振興を図ることを目的に、相互の学術交流と連絡協議を行い、さらに国際的な東洋学(アジア研究)の動きにも対応していく機関とする、というものであります。

協議会の第一回総会は本年六月十一日に東京で催され、会則制定のための審議などが行われました。これにより協議会は、「正規会員」とオブザーバー(非正規会員)とをもって構成されることになり、入会申し込みの受け付けが始まりました。これを受け本学会も、本年九月一日付で協議会の「正規会員」として入会の申し込みを致しました。現在のところ、協議会への入会申込み件数は、正規会員が三十三団体、オブザーバーが七団体となっております。

また、九月二十四日には東洋学研連としては最後の活動となった公開シンポジウム「アジア人間科学への道—東洋学とアジア研究」が催され、今後の協議会を軸とした斯学振興と、交流・連絡体制の強化などが話し合われました。

このように、日本学術会議・東洋学研連の廃止とこれに代わる新たな東洋学研究の交流連絡システムが動き出したことになりましたが、本学会として具体的にどのような関与が可能で、また、望ましいかなどについては、今後の推移をみながら適宜適切に判断していく必要があるように思います。このため学会では、今後の同協議会への対応を事務局が所管することになりましたので、合わせてご報告致します。

(学術局長)

本年度の第16回書学書道史学会大会の詳細をお知らせします。大会は10月28日(金)から30日(日)までの3日間にわたり、四国大学・交流プラザほかで行われます。日程並びに発表者等は以下の通りです。奮ってご参加ください。

参加申し込み等は、同封の申し込みハガキで、10月20日(木)までにお願いします。

〈日 程〉

【10月28日(金)】

16:30～19:00 定例理事会 (於ホテルグランドパレス徳島)

【10月29日(土)】

会場：四国大学・交流プラザ

8:50～

受付開始

9:20～10:00

平成17年度総会

10:10～12:10

研究発表

〈第1会場〉(第1フォーラム室)

①「徐渭書法編年試論」荒井雄三

②「明代後半期における北方の『書』の状況—山東・邢侗を中心として」増田知之

③「『色彩』に関する文字の考察」張 莉

〈第2会場〉(第2フォーラム室)

④「日本印人研究—山田寒山の印学と『印章備正』を中心に」神野雄二

⑤「清代を中心とした、刻字と印人」高木義隆

⑥「石刻書法としての側款」高口盛幸

12:10～13:10

昼食休憩 (於ホテルグランドパレス徳島)

13:10～15:50

研究発表

〈第1会場〉(第1フォーラム室)

⑦「楊守敬と中林梧竹の関連性を求めて」櫻木享子

⑧「『草聖』概念の歴史的変容」松永恵子

⑨「楚文から秦文への転換—馬王堆帛書『式法』の初歩的検討」福田哲之

⑩「王僧虔『論書』から『法書要録』を見直す」大野修作

〈第2会場〉(第2フォーラム室)

⑪「『定家自筆』への視座」家入博徳

⑫「佐竹本三十六歌仙絵の詞書の書風について」笠嶋忠幸

⑬「『源氏物語』に見る紫式部の書美について」杉浦妙子

⑭「書跡における復元模写の方法と課題」古谷 稔

15:50～16:00

休憩

16:00～16:40

研究発表

〈第1会場〉(第1フォーラム室)

⑮「杜甫の書論—ことに同時代批評の視点から」興膳 宏

16:40～17:30

特別講演

〈第1会場〉(第1フォーラム室)

○「近代日中書法交流史に関する遺墨・資料」杉村邦彦

17:30

閉会の辞

18:00～20:00

懇親会 (於ホテルグランドパレス徳島) 余興 阿波踊「浮浮連」演舞

【10月30日(日)】

10:00～11:30

鑑賞会 (於徳島県立文学書道館/10時現地集合)

「近代日中書法交流史を担った人々」展①「楊守敬と日本人書家」

(列品解説：大橋成行、杉村邦彦)

《研究発表レジュメ》

⑮ 杜甫の書論——ことに同時代批評の視点から——

興膳 宏

杜甫（七一―七七〇）の詩はいま千四百首余りが伝わるが、その中には書及び書写に関連したものが少なくない。それは、杜甫の書に対する関心の大きさを物語るものである。

「九齡書大字、有作成一囊」（「壯遊」）と回顧するように、杜甫自身、年少のころから書写の修練に努めた。人材選抜の四つのポイント「身・言・書・判」とされ、「楷法適美」が求められた（『新唐書』「選舉志」）。時代環境にあつては、当然のことでもあるが、彼の書に寄せる関心には人並みはずれたものがある。

まず交遊関係において、書の占める位置が大きい。現存する作品中で最も初期のものに属する「飲中八仙歌」では、彼の親しく交わった八人の酒仙たちの醉態をユーモラスに描いているが、そのうち賀知章・汝陽王李璣・李白・張旭の四人は、書の達人としても聞かえていた。また、敬慕する八人の先賢を追想した「八哀」でも、嚴武・李璣・李邕・鄭虔の四人については、彼らの書について言及している。他の詩でも、しばしば書跡について触れている。

杜甫には、唐代書史に名を刻される名家の人や書跡を論じた詩が数首あり、正統的な書論とは別に、同時代人の目を通して見た唐の書家への批評として珍重される。たとえば「寄張十二山人彪三十韻」は、詩人で書家だった張彪に寄せた作。「觀薛稷少保書畫壁」は、書画を巧みにした薛稷の筆になる書畫壁を見た感慨を記す作。「李潮八分小篆歌」は、杜甫の甥に当たる八分書の第一人者李潮を称えた詩。「送顧八分文學適洪吉州」は、やはり八分書の名手である顧戒奢に贈った詩で、いずれも同時代の書に向けた杜甫の批評眼が窺える。

こうした一連の詩は、唐代の書への貴重な証言となっており、書論資料との比較検討を通じて、唐代書史への視野を広げることができよう。また、杜甫は書と共に絵画を愛好したことも知られ、いわゆる「論画」の詩を多く伝えるが、それらを併せて検討することにより、杜甫の美意識を総体的に考察することも必要である。

【第16回大会関係各種連絡事項】

- 第16回書学書道史学会大会会場の四国大学・交流プラザは、JR徳島駅から駅横手のアーケードを徒歩5分という交通至便の地にあります。また、30日(日)は、近代設備の整った徳島県立文学書道館で、同館主催の「近代日中書法交流史を担った人々」展のパートⅠ、「楊守敬と日本人書家」の鑑賞会となります。
- 大会への参加申し込み等は、同封の申し込みハガキで、10月20日(木)までにお願いします。
- 大会参加費(資料代込み)は、例年の通り会員(同伴者含む)3,000円、学生・院生会員と会員の同伴する学生・院生はいずれも2,000円です。
- 29日(土)の昼食弁当は1,000円、また懇親会費は7,000円です。申し込みハガキに必要事項を記入して返送のうえ、大会用の振替用紙でご送金下さい。大会関係のご送金は10月25日必着とします。なお、年会費の納入は、混乱や処理ミスを避けるため大会用とは別の振替用紙をお使い下さい。
- 宿泊のホテルについては徳島市内はホテル事情がよいので、事務局では手配致しません。なお、役員各位(幹事含む)分は理事会開催の関係上、一括予備手配済みです。
- 大会当日の緊急連絡先は、事務局長携帯(090-3084-8561)とします。

〔研究発表レジュメ〕

① 徐渭書法編年試論

荒井 雄三

明時代の後半、嘉靖・万暦に活躍した紹興の徐渭一五二一—一五九三は、戯曲詩文書画を得意とした奇才の文人として名高い。発表者は、そうした徐渭の多面性のうち書画にしばらく総合的な研究をめざしている。

そのための基礎作業として、すでに図版資料を主として徐渭自用印の網羅的な研究を行った。自用印がセットとして使われるという独特な用法から、書画をAからJにグループ分けし、次のようなゆるやかな編年を導き出した。1・早期（一五六〇年代から一五七五年完全釈放まで。ABCのグループ）↓2・中期（一五七五年から一五八六年王家転居まで。DEFJのグループ）↓3・晩年（一五八六年王家に書齋を構えて以降。EGJのグループ）↓4・最晩年（一五九三年に亡くなるまでの数年間。HIのグループ）

この編年は、印と書画自体との相対的独立性という関係から、ゆるやかなものとならざるを得ず、実地調査を伴う書画本体に分け入った今後の検証が不可欠となる。

徐渭の書については、徐渭自身が「吾書第一、詩二、文三、画四」と述べているにもかかわらず、現在の評価は、大写意花卉画を切りひらいた祖としての画のそれより低い。徐渭の書が、明時代の書の展開においてどう位置付けられるか、翻ってそれ以前に徐渭の書自体、その特徴、変遷、達成点など未だ充分に明らかにされているとはいえない。

今回は、徐渭の書について、点画・結体・章法という書の造形的な基本要素から、印と同様な網羅的な研究を行い、その特徴を抽出し、その変化を考察し、自用印からみた書画編年の妥当性を検証したい。

〔研究発表レジュメ〕

② 明代後半期における北方の「書」の状況

— 山東・邢侗を中心として —

増田 知之

明代中期以降における江南地方の文化隆盛は、数多くの先行研究が等しく言及するところである。しかしながら、江南地方に限定されることなく、北方をも視野に入れた文化史研究というものは、管見の限りにおいて極めて少ない。同様のことは書法史研究においてもいえる。こういった研究状況の中では、当時の北方における「書」を含めた文化的状況が如何なる様相を呈していたのかという問いに容易に答えることはできない。

報告者は、先に明代に刊行された「法帖」に書法史と出版文化史との接点を見出し考察を加えた。嘉靖年間より明末に至るまで、蘇州、松江、嘉興といった江南諸都市を中心として、民間での法帖刊行が盛んに行われるのであるが、この法帖の刊行という一観点からみても、江南地方（南方）の北方に対する文化的優位は明らかである。

しかし、この南方一辺倒の法帖刊行の中でも、北方において法帖は刊行されている。万暦年間に刊行された邢侗による『来禽館帖』、泰昌・天啓年間に邢侗の書蹟を集めて刻された『来禽館真跡』・『統刻』、更には天啓年間に刻された『之室集帖』等である。邢侗（嘉靖三〇—万暦四〇）は山東済南府臨邑県の人で、諸史料において常に江南の董其昌と並称される程の北方を代表する書人であるが、国内においてはいまだその専論を見ない。

本報告では、この山東の邢侗を中心に据え、当時の北方における「書」を中心とした文化的状況について考察を加えることを主たる課題とした。その際、彼の「書」をめぐる様々な人々との交流の実態を探るとともに、より広い視野のもと北方の書文化の広がりについても言及するつもりである。

《研究発表レジュメ》

③「色彩」に関する文字の考察

張 莉

色彩感覚は目という視覚をうけもつ器官でとらえられる、感覚中でも非常に重要な部分である。色彩については、古代から代表的な色とされた「五色」（青赤黄白黒）が易学の発展の中で五行に配され、色彩に対する中国独自の観念ができた。「五色」は、大地の色として中央に配された「黄」が天に配された色「玄」と対応する。「玄」は「黒而有赤色」で「陰陽二氣に分化しない混沌たる未形の総體」としての意味を有する。

「色」については、「五色」にみるような色彩の義と、「女色」にみるような美的性的な義がある。「采」は甲骨文字において「大采」「小采」として色彩の義で使用されており、『周禮』にも「五采」の記述がみえるところから、色を表わす最も古い文字であると考えられる。また「勿」は多くの色を使つた「雜帛」の意であり、「物」は種々雑多な牛の毛の色を示すところから萬物を表わす物の義が生じている。「物」の義の中にある色とものとの相関関係は、「色」にも見られる。「色即是空」における「色」は視覚的な色と触覚的なものの関係を内在しているとみられる。

甲骨文字・金文の時代にはなかった色名が、『説文』には多く載せられているようになる最大の理由は染色技術の発達である。「糸」は帛の材であり、「素」は白帛を意味し、いずれも染色前の織維であるが、それが染色と関係することにより、「紅」「緋」「紺」「縹」などの色を表わす名称が生まれた。また「黼」は刺繍の文様に象つた文字であるが、「黻」「黼」など形声文字になると、色名を表わす刺繍の義に変じている。

中国古代にみられる「色彩」についての感覚は以上の通りであるが、易学にみられる「五采」の観念や「物」字にみられる色彩観念には、中国独自の考え方が根底に通っていると思われる。

《研究発表レジュメ》

④日本印人研究

—山田寒山の印学と『印章備正』を中心に—

神野 雄二

日本における印学や篆刻学の研究にはどのようなものがあるのだろうか。中国ではこの分野の研究は近年盛んに行われており、刊行物も多い。日本の印章や篆刻は、中国のその影響のもと受容・形成されてきた。ただ、日本印学史研究は、まだ体系化されておらず、今後の研究成果が待たれる。

さて明治の篆刻家、山田寒山（安政三〜大正七、一八五六〜一九一八）の業績に、印学の啓蒙・発展が挙げられる。丁未印社を設立し篆刻の啓蒙に尽力したこと、また明治印学会の創立会員になり篆刻の発展にあたつたこと、そして富益斎の『印章備正』の校訂刊行等が主なものである。なかでも『印章備正』の刊行は興味深い。大正七年の「北越新聞」に「富益斎と寒山」の記事が掲載されており、出版の経緯などの幾らかがわかる。

山田家に蔵される『印章備正』は、公刊本の元となった写本である。校正は丁未印社同人達、中でも河井荃廬が中心にあたっている。荃廬の校正の跡を見てみたい。

また、早稲田大学は、会津文庫に『印章備正』を所蔵するが、会津八一の書き入れがある。八一は印学に詳しく、この書き入れを考察し彼の印学を探りたい。

本稿では、山田寒山刊行の『印章備正』の成立と内容を見ていくとともに、関係を指摘される杜濤『徵古印要』七巻との関連を検討する。さらに、甘暘の『印章集説』との関連にも言及し、これに根本があると推論される高芙蓉派の印学についても考究する。

以上、本稿では、山田寒山の印学面での業績を、旧稿以降の新知見を加え述べるとともに、『印章備正』に纏わる事柄を精査し、日本印学史の一端を明らかにする。

《研究発表レジュメ》

⑤ 清代を中心とした、刻字と印人

高木 義隆

清代後期に、文人とは別の階層、字を刻することを職業にしていた人々のなかから印人がでてきているようだ。刻字者の評価という観点から歴史を概観する。

後漢の西嶽華山廟碑、北魏の石門銘にも刻者の名がある。

唐の雁塔聖教序では、「萬文韶刻字」と碑文にある。近年出土した裴守真書の李愬碑(六四九)にも、刻字者名があり、刻者「萬?裕」は「萬文韶」の縁戚である可能性がある。明中期に墨池堂選帖を彫った章藻は自分で出版業ができるほどの資本と名声を持っていた。

清代、鄭板橋と交際した竹刻家の潘西鳳は、竹根や象牙の印を彫った。上海博物館に「画禅」2字の小さな竹根印がある。上海博物館の潘西鳳の留青菊華竹石図筆筒が代表作のようだ。彼は文人とはいえない。ただ、刻者として名声がある。

呉讓之(二七九九—一八七〇)の汪中本宋拓定武蘭亭復刻は精密な作品である。

張辛(二八一—一八四八)は、飛白で有名な張燕昌の甥、兄弟の金石家の張廷濟にとっても甥にあたる。張廷濟のところで学び、篆刻文字刻を得意とした。篆府第九冊、に「履研齋」琥珀印が収録されている。また、法帖の刻も行った。道光二五年、海寧の蔣光煦が宋拓群玉堂帖第八の米南宮帖の残本を集めて重刻したとき、張辛に模写させて刻したと、張廷濟が復刻本のなかに跋を書いている。

ここに、扇の骨に張廷濟の書を刻した作品を紹介する。張廷濟が張辛に臂摺に彫らせた、黃庭堅「伏波神祠詩卷」集字について考察する。また、何紹基が張辛の「伝記と追悼詩」を書いていることに留意する。清代の刻字として、涓・張希黄の作品も紹介する。

清末 呉昌碩と関係があった唐仁齋の潤筆、中華民國二十一年、西冷印社、呉徳光の潤筆を紹介する。

《研究発表レジュメ》

⑥ 石刻書法としての側款

高口 盛幸

清代以降の側款の表現は、長文の款字や画像など多様であるが、特に長文の側款は小字多字数ということもあり、一画を一刀で刻す単刀法を用い、書体も行草より楷書が数多く刻されている。私はこのような変化の要因を、刻者と別に他人が刻した跋文「観款題記」の役割ではないかと考え、単に制作過程を刻すのではなく、その印に関わる多くの情報を刻している点に注目していくことにする。

梁裘の「蘭生而芳」印には蔣仁が乾隆三十九年(一七七四)に跋文を刻し、その後、乾隆四十八年(七八三)に沈欽と韓周口・胡本・項朝表がそれぞれ跋文を刻している。この跋文からは、蔣仁が乾隆三十九年十一月八日に広陵市で梁裘の印を得た後、沈欽らがどのような経緯で得たのか定かではないが、所有者が次々に変わっているなど、以下の四点の動きが見えてくる。

① 印に対する鑑賞や批評としての観点、また印が鑑定対象であること。

② 刻者の側款に合せた内容の跋文であること。

③ 交友関係に印が用いられていること。

④ 刻者の側款の趣に調和した跋文書体であること。

特に①の鑑賞や批評・鑑定としての観点は「観款題記」の性質をよく表しており、刻者の学書や技法、どのような印譜に収載されているかなど、内容が機能的なものへと変化している。つまり、清末清初の側款は、芸術性を追及する傾向が強く、側款の機能性にはそれほど重視していない。対して、清末民国の「観款題記」の側款は、鑑賞や批評・鑑定としての意図が反映され、側款を拓本にとった印譜、また、印面自体を媒介にし、正確な情報を伝える役割として刻している。この表現する意図の違いが側款を多様化へと推し進め、技法も双刀法から機能性に優れた単刀法へと移行させたのではないだろうか考えている。

本発表では、芸術としての側款とともに、情報を伝える側款という視点から、印譜との関連性も取り入れていくことにする。

〔研究発表レジュメ〕

⑦ 楊守敬と中林梧竹の関連性を求めて

櫻木 享子

日本の近代書道は明治一三年（一八八〇）に清国公使館の随員として楊守敬が来日したことによつてはじまる。楊守敬は日本滞在中の4年間、朝野の日本人達と交わり、明治の書道界に多大な影響を与えた。楊守敬と交わった主要な日本の書人に日下部鳴鶴や巖谷一六らがいる。『楊守敬集』全二三冊の中には彼らに関する記述は散見するが、ここに当然記述されるべき日本の書人として松田雪柯・中林梧竹がいるにもかかわらず、彼らへの言及は見られない。このうち雪柯については『松田雪柯東都日記』が伝存し、楊守敬との具体的な交友関係が明らかにされつつある。一方、梧竹については、楊守敬と同様北京において潘存に直接師事したにもかかわらず、二人が交友関係を結んだという記録は今のところ発見されていない。それでは、楊守敬と梧竹にはなんらかの関係性あるいは共通性がなかったのだろうか。

杉村邦彦氏は、「梧竹は明治一五年一〇月一七日から同一六年一〇月七日の直前まで潘存に師事し、潘存書法の要諦である「斬釘截鉄」の書法を学び、楊守敬も師潘存から書の基本は「斬釘截鉄」であるという教えを受けた」と述べた。（徳島県立文学書道館発行『ことのは 八号』）私はそのことも念頭に置きつつ、さらに考察を一步深めたい。

例えば、楊守敬と中林梧竹には共通の友人が少なからずいる。まず中国人では、黎庶昌・余元眉・李鴻章等、日本人では日下部鳴鶴・巖谷一六・山本竟山等である。梧竹は彼らとの交友を通して、書法や精神面で少なからず影響を受けたにちがいない。また中林梧竹は楊守敬の『楷法溯源』を忠実に模写して、『楷書古鑑』と題する一書を残しており、楊守敬に深く私淑していたことが窺える。

さらに、二人の共通の師である潘存に着目したい。資料として最近天下の稀書『潘存公遺集』のコピーを入手することが出来たので、これを中心にして潘存の交友関係に考察を加え、さらに楊守敬と中林梧竹との関連性にも論及したい。また、九月上旬海南島・北京を訪問し、潘存の遺跡や遺墨などを現地調査する予定であり、その成果をも発表に盛り込むつもりである。

〔研究発表レジュメ〕

⑧ 「草聖」概念の歴史的変容

松永 恵子

ある領域において最高の到達点を極めた人が「聖」の名をもって呼ばれることは、書において「書聖」があり、それに隣接する絵画や文学に「画聖」や「詩聖」があり、また他の分野においても、「某聖」「木聖」「漢聖」「易聖」などがあることからわかる。「草聖」もそれらの一つであり、「草聖」とは一般に、草書に最も造詣の深い人物を指し、具体的には後漢の張芝や中唐の張旭がそれに当たるとされている。

しかしながら、「草聖」の語義や用法は複雑であり、単に「草書に最も巧みな人物」とか、「具体的には張芝や張旭をいう」といった簡単な説明では片づけられないものがある。すなわち、「草聖」は、「草書に最も巧みな人物」だけではなく、「優れた草書」や単なる「草書」の意としても用いられるようになり、人物も張芝や張旭だけではなく、懷素や釈光などをもいうようになるなど、変遷し流動化しているのである。

どうして、このようなことが起こったのか。また、書体の中では、どうして草書にのみ「聖」の字が冠せられたのか。

本発表では、「書聖」はもとより、「詩聖」や「画聖」などの他分野に見られる「聖」を冠する用例をもあわせて考察しながら、「草聖」概念の歴史的変容について述べようと思う。その変容を通してみれば、単なる草書や草書評価の歴史だけではなく、書芸術としての草書の特徴や他の書体とは異なる独特の位置などが明らかになるのではないかと思われるからである。

《研究発表レジュメ》

⑨ 楚文から秦文への転換

馬王堆帛書『式法』の初歩的検討

福田 哲之

一九七三年に馬王堆三号漢墓より出土した大量の帛書が、秦漢学術史研究に画期的な進展をもたらしたことは周知の通りである。これら馬王堆帛書は、書道史・文字学研究においてもきわめて重要な意義をもち、帛書の多様な字体は、戦国から秦漢にかけての筆記文字の変遷を考察する上で一つの基準を提供すると考えられる。

本発表で取り上げる『式法』（別称『篆書陰陽五行』・『陰陽五行甲篇』）は、『式』（天体観測を中心とする占術）の運用や吉凶時日の選択などに関する数術書であり、書写年代は帛書中に見られる「廿五年」「廿六年」という始皇帝の紀年から、前二二二年・前二二一年頃と推定されている。

『式法』の書道史・文字学上の意義として注目されるのは、楚簡帛文字との間に他の馬王堆帛書には見られない固有の共通性が認められる点である。『式法』と楚文字との関連については、つとに李学勤『古文字学初階』（中華書局、一九八五年）が、楚文字と秦文字との混用を指摘し、秦人の字体に不慣れた楚人が書写したものであるとうとの注目すべき見解を提出している。また、馬王堆漢墓帛書整理小組『馬王堆帛書《式法》釈文摘要』（『文物』二〇〇〇年、第七期）も、釈読上の障害として『式法』に大量の楚文字の成分が含まれることに言及している。これらの指摘と書写時期とを考え合わせるならば、『式法』が楚人の書写にかかることはほぼ疑いがないと言えよう。すなわち『式法』は、秦の占領下における楚人の書記言語の実態を示す貴重な資料と見なされるのである。

本発表では、戦国秦漢における筆記文字の変遷という視点から、管見のおよんだ十八点の図版と陳松長『馬王堆簡帛文字編』（文物出版社、二〇〇一年）にもとづく統計分析により、『式法』の字体について初歩的検討を加えてみたい。

《研究発表レジュメ》

⑩ 王僧虔「論書」から『法書要録』を見直す

大野 修作

南齊の王僧虔の作とされる書論である「論書」は『法書要録』の中に収められているが、テキストとしてはばらつきがある。例えば『津逮秘書』本と『書苑菁華』本は基本的に同じであるが、朱長文の『墨池篇』本は異なっている。内容的に『津逮秘書』本の「論書」は全体で前・中・後の三部の構成になっている（仮にそれをA・B・Cと名づける）が、『墨池篇』本は前・後（A・C）のみを取って、中間のB部の部分は、別に「齊王僧虔論書啓」として、別の手紙として扱っており、「論書」の中には入っていない。これに似た立場を取るものに、嚴可均がおり、『全晉文』では、「論書」として収めるのは、A・Cの二部だけであり、且つBの部も前後で文脈が異なるとして、一方は「竟陵王が王僧虔に答えた啓」B1、一方は「王僧虔が竟陵王に答えた尺牘」B2として、二通の手紙と見なして、「論書」とは別の部に置いている。

Bの性格付けにはいまは深入りせず、A・Cを「論書」とすると、羊欣撰とされる「古來能書人名」との関係の問題にしなければならぬであろう。と言うのも王僧虔「論書」と羊欣「古來能書人名」は、人名的に重出するものもあり、韋誕のように同一の記事も見られ、テキストの成立に問題をはらんでいるからである。そしてこの問題は、根底的には『法書要録』をおさめる現存する完本が、成立したときから時代を経た明版の『津逮秘書』本であることから起因しているように考えられる。張彦遠が編纂した晩唐から北宋にかけての版本『法書要録』があれば、それが尤も依拠すべきテキストになるが、それが存在せず、南宋版も元版もなく、明に入って毛晋は『津逮秘書』本を編纂したが、かなり苦労して題目も本文も手を入れたと思われるふしがある。それ以前に成立した北宋の『墨池篇』、南宋の『書苑菁華』（いずれも宋刊本は知られず、知られるのは明刊本であるが）に収める書論の方が、古い姿を留めている面があると思われるが、書論集成のテキストだけでは解決できない問題もあり、類書（例えば、『太平廣記』、『太平御覽』など）をも視野に入れながら、南朝における書論確立者としての王僧虔の姿と。唐末以後の書論の整理のされ方を考えてゆきたい。

《研究発表レジュメ》

⑪「定家自筆」への視座

家人 博徳

近年、藤原定家の「自筆」と称されてきている書写本において、用字、表記等の研究がさらに進められる一方、その自筆性を問う意見も提示されている。

尊経閣文庫蔵『土左日記』、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』は従来、定家自筆本として伝わるものであるが、藤本孝一氏の書誌的研究を中心に、各々の書写本に書写されている大部分の筆跡が、定家側近の右筆によって書写され、後に定家によって校訂された定家校訂本であるとする説が提唱されている。

「定家自筆」と称されてきている筆跡をみると、「定家風」と呼ばれる特有の書体で書写されているが、尊経閣文庫蔵『土左日記』、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』の書写部分には、意図的に「定家風」を創ろうとしていると思われる痕跡が見られるというのである。

藤本氏等によって想定されている尊経閣文庫蔵『土左日記』や、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』における定家の筆跡に酷似した右筆の存在は、定家の筆跡が定家もしくはその周辺によってすでに特権化されていた可能性を示すことになり、今後の展開によっては、同時代における筆跡自体の「価値」に対する一視座を示すことになるとのと思われる。

今般稿者は、「定家自筆」と称されてきている御物『更級日記』において、尊経閣文庫蔵『土左日記』、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』同様、意図的に「定家風」を創ろうとしていると思われる形跡が見られたため、該当箇所を提示するとともに、「定家自筆」について考察してみようと思う。

《研究発表レジュメ》

⑫佐竹本三十六歌仙絵の詞書の書風について

笠嶋 忠幸

平安時代十二世紀末のこと。法性寺・藤原忠通を筆頭とした新しい書風がそれまでの書風に台頭し、日本書道史の動向を変えるところとなった。平安時代末から鎌倉時代初期にかけて、一気に史上を覆ったこの新風は、法性寺流の名の下にいくつかの筆跡群を包括している。その一つに、後京極良経筆の伝称から集束される筆跡群、後京極流がある。

後京極流の書風を検討するにあたっては、その基準とすべき良経自筆現存作品の少ない点がまず障害となる。ならびに当時の遺品において有年記資料が少ないという事情もあり、平安時代の古筆作品における書風研究とはまた別の意味での難しさを孕んでいる。

こうした点から従来の研究では、後京極流書風を検討するにあたっては、伝存古筆作品群を取り扱うと同時に、絵巻の詞書書風についてもその筆跡群として視野に入れ、比較考察がなされてきた。「北野天神縁起絵巻」「紫式部日記絵巻」等の詞書書風がその代表的なものであるが、同じく「佐竹本三十六歌仙絵」の詞書もまた後京極流書風を考察するにあたって大事な作品である。

後京極流書風の特徴は、忠通および忠通周辺の筆跡群と大いに近似点は認められるものの、また一線を画した特徴もあり、その位置づけや年代考証となると容易ではない。本発表では「佐竹本三十六歌仙絵」をテーマに絵画表現も含む作品全体の特徴を関連情報として取り上げながら、あらためて後京極流書風、あるいは良経と伝称する筆跡群それぞれの特徴ほかについての再考察を試みたい。

《研究発表レジュメ》

⑬『源氏物語』に見る紫式部の書美について

杉浦 妙子

『源氏物語』は物語文学の冠たる存在であると言っても過言ではない。精緻な心理描写、洗練された文章中に因果応報の人生観を宿し、十一世紀初頭に成立したにも拘らず、現代に於いても愛読される不朽の名作である。

精緻な描写はさまざまな分野の表記にも及び、書に関する記述も論理的且つ繊細である。作者紫式部は諸所で己の書に関する美意識を、源氏の言葉借りたり、登場する女性達に仮託して表現しており、物語上の彼女らの役割と合致して、ストーリー展開に大きく関わっていく。

紫式部の生きた撰閲時代は、藤原行成の時代とも合致し、唐様から和様へ転換して、和様の完成した時代である。一見変化のないように感じられる平安時代は、書風の上から見れば大きな変革のあった時代で、『源氏物語』成立の時代は、書道史上では、『北山抄紙背仮名消息』が書かれた時代と合致する。『北山抄紙背仮名消息』は見事な連綿がなされ、仮名の完成を髣髴とさせる貴重な遺品である。当然作者紫式部も仮名の完成の姿を見ていた訳で、「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりてゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。」と源氏に言わしめている程である。

『源氏物語』の描写を基に、書評を展開した論文はいくつかあるが、本稿は文章中に散見される「書」に関する表記を拾い出し、式部の書に関する美意識を整理する事を企てた。『源氏物語』成立前後に実際に残されている書の遺品と、物語上で描写されている書評との比較を試みながら、式部が抱いている美意識を考察する事によって、十一世紀初頭の理想的とされる書美を考えてみたい。

《研究発表レジュメ》

⑭書跡における復元模写の方法と課題

古谷 稔

十七年度に入り、文化財の模写模造に関連の展覧会二件の開催が目止まる。東京国立博物館主催の特別展「模写・模造と日本美術——うつす・まなぶ・つたえる——」（東京国立博物館平成館・七月二十日～九月十一日）、および共同通信社主催の「高句麗壁画古墳展」（国際交流基金フォーラム・八月十三日～九月四日）がそれである。いずれも伝統文化の継承、あるいは世界遺産の永久保存といった課題を掲げ、二十一世紀に生きるわれわれ日本人に多くの問題を投げかけた貴重な催しであった。

前者の一部に、江戸時代の狩野派を中心とした名画の模写が展示され、それらは形を「うつす」だけでなく、制作者の精神を「まなぶ」態度が読み取れ、さらに今は亡き雪舟画の一面を「つたえる」という、模写特有の価値も披露されている。後者は、朝鮮半島において世界遺産に登録された古墳の概要を貴重な写真と、数種の模写を交えながら、壁画古墳の美術的価値を伝えると同時に、経年変化による壁画の剥落や褪色などの現状を知る上で、模写は伝来過程における一時点の正確な情報を伝える役割も果たしている。

これらの展覧会の中には書跡も含まれている。「本願寺本三十六人家集」「平家納経」など田中親美撰本の優品を除き、画家による絵巻の詞書や、壁画の中の文字に注目すると、そこでの書跡の模写は「書」の活きた原本の技法を踏まえたものでなく、双鉤填墨等の古来の技法を用いながら、「書く」という技法を離れて絵画的な「描く」「手法」によっている。「つたえる」には、「形」とともに、「美」が伴うものでなければならない。

本発表では、わが国において従来、模写・現状模写・復元模写——がどのような方法によっていたか、書道史上の模写の遺品を例に考察を加え、さらに近年の調査報告などにも目配りしながら、今後の課題として、書跡における復元模写の方法を提示したい。

草塩藻学書

助さんの調査

鈴木 晴彦

テレビ時代劇「水戸黄門」でお馴染みの「助さん」が実在したことはつとに知られている。モデルとなったのは、水戸彰考館総裁を勤めた佐々十竹（一六四〇～一六九八）といわれる。十竹はその号で名を宗淳、通称を介三郎といった。出身は讃岐（現香川県）の一小島、つまり瀬戸内海に浮かぶ小島に生まれ、一五歳で京都妙心寺に宿坊して修学を重ねたと伝える。水戸藩に招かれたのは、三五歳をむかえた延宝二年（一六七四）であった。以後、水戸藩の史臣として身を投じ、『大日本史』編纂に大きく貢献した人物である。もちろん、『隠居』こと徳川光圀（一六二八～一七〇〇）に従い、全国行脚をする漫遊譚は講談の世界での脚色であることはいまでもない。

もっとも、十竹だけは諸国行脚の旅を重ねている。その旅は主君光圀から命を受けた、いわば「藩命出張」であった。行脚は畿内中心に重点が置かれたが、ときには北陸・中国・九州へも足跡を残している。いずれにしても、十竹のこうした巡歴は『大日本史』編纂の史料探索がその主な目的であった。

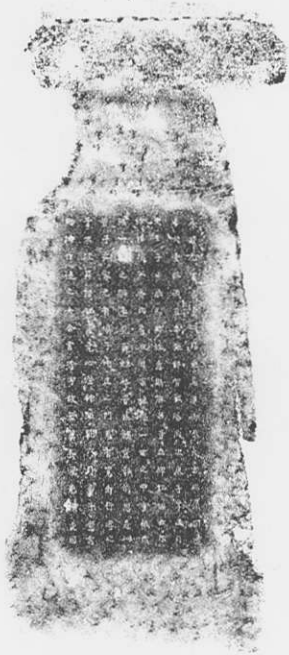
ところで、この探索行脚の延長線上にあったのが、近隣で那須湯津上村（現栃木県那須郡湯津上村）の調査である。ときに貞享四年（一六八七）のことであった。調査対象は長らく野中に放置されていた古代碑、すなわち『那須国造碑』の調査であった。調査の状況を『文苑遺談』は「宗淳至碑下洗而視之、文字鮮明、即古國造碑也。」と伝えている。一〇〇〇年来の苔を碑面からきれいに洗い落とすと、くっきりと文字が確認さ

れたのであろう。そして、この古代碑を永い眠りから呼び覚ますかのよう

に拓が打たれたのである。

伝来の文献資料によれば、この碑の発見は十竹の調査に先立つこと一〇年余り前の延宝四年（一六七六）であった。磐城（現福島県）の僧侶で円順なる者によって発見されたという。円順はただならぬ石碑であることを悟り、これを近在の馬頭村（現栃木県）に住む大金重貞に語った。重貞はこの地を統括する庄屋で、いわば当地の「村長さん」である。当時の馬頭村は常陸国に属し、領主は光圀であった。天和三年（一六八三）六月、重貞は光圀が領内巡視のために馬頭村を訪ねた折、この碑のことを言上した。これが機縁となって、やがて十竹による調査が実施され、その報告書が光圀の許に届けられたのである。

十竹の調査終了後、無名の古碑は光圀の命によって手厚い保護保存の処置が施された。現在、笠石神社の御神体として碑面の損傷が極めて少ない良好な状態で伝承された背景には、こうした経緯があったからである。数少ない日本古代碑の中にあつて、『那須国造碑』の伝存は極めて貴重な文化財である。文化財の保護保存は、先を見すえた為政者と有能な調査官によって可能ならしめるものである。『那須国造碑』はこのことを改めて現代の私たちに語りかけている。〈碑文内容については、学会編纂『書道史年表事典』所収の森岡隆氏の解説を参照願いたい。〉



談話室

手彫りの碑

比田井和子

書は恵まれた芸術だと思ふ。「彫る」という手段のお蔭で、私たちは三千年以上の書の歴史を体験することができ。絵画も彫刻も望み得ない贅沢だ。では、現代の書はどうだろうか。

比田井天来の生誕地、長野県佐久市で、今では失われてしまった「石碑手彫り」の技術を復興し、現代の名碑を後に残そうという事業が進行中だ。その最初の成果が「天来自然公園（仮題）」。中国から手彫りの名手、王建虎先生を招聘し、公園に建立する天来とその門流の碑、九基を彫り上げたところだ。

湧きあがる迫力、わずかなかすれをも再現する繊細さ、機械彫りとはまったくの別物だ。

公園を整地し、管理するのは「NPO 未来工房もちづき」。現在の状況は、天来書院ホームページで公開中です。

寒山寺の鐘

岩切 誠

張継の楓橋夜泊詩でも知られる蘇州の寒山寺の鐘の話。一八九七年、呉昌碩を訪ねた山田寒山は、その足で寒山寺を訪れた。そこで目にしたのは長髪族の乱で灰燼に帰し、荒れ果てたままの寺であった。「夜半鐘」の行方は不明。寒山は寺の再建と復興を願い、同寺の住職となった。一九〇五年の春、この鐘が北陸の寺で鋳造されたことが分り、伊藤博文と計り、新梵鐘再鋳

と寄進の事業に取りかかった。伊藤公は事業半ばに薨去したが、鐘は五年後に完成し、後年寒山寺に贈られることになる。

ちょうど百年前のできごとである。

ボディーブロー

前田秀雄

中国遊学から十六年が経った。最近、その時に受けたボディーブローがじわりじわりと効いてきた。「三國志」の神書「華佗」の打つ鍼（はり）の如く！

「書」はやはり外国の文化だった。

実相一瞥の後、即、白旗を掲げた私。酒席の即興で作詩して書作し、布字

もせずに呉談之風の精緻な刻印をこなす同学たち。当代名家林散之の高弟、王冬齡老師の個展会場では、ある小品の前で、これは四枚も書いたよの一言。

広い展覧館を埋め尽くした佳作は、大部分が「一枚書」で仕上げられていた。書がアートとして扱われる現場ですらこの有様だ。しかし、真正の「書」はアートを超え、遙かに広大無辺である。あ、！

◆学会会議メモ

○理事会（七月十八日、於一庵アートホール会議室）

出席者 興膳宏、杉村邦彦、田中有、大橋修一、萱原晋、杉浦妙子、中村伸夫、古谷稔、河内利治、鈴木晴彦、辻井義昭、鶴田一雄、富田淳、福田哲之、森岡隆、横田恭三、浦野俊則、野中浩俊

○会報編集会議（九月十一日、事務局）出席者 萱原晋、澤田雅弘、杉浦妙子、柿木原くみ、小川博章、笠嶋忠幸

◆会員動静

○江口啓爾会員 第三十七回日展五科新審査員就任

○新井儀平常任理事 全日本書道連盟理事長就任

○河野隆会員 「第五十回現代書道二十人展」出品者に選任

○新入会員紹介（肩書は入会時）

○直井 誠 S 四十八年生 愛知県立高教諭

○前田惣吉 S 十八年生 盛岡大教授

○林 稔 S 二十八年生 新潟県立高教諭

○小川貴史 S 四十九年生 新潟県立高教諭

○花田智裕 S 五十六年生 福岡県・高教諭

○大原康弘 S 四十四年生 大東文化大学院生

○黄華 源 S 三十四年生 大東文化大学院生

○松尾大輔 S 五十六年生 大東文化大学院生

○角田健一 S 五十七年生 大東文化大学院生

○西山尚志 S 五十三年生 大東文化大学院生

○讃岐浩史 S 三十年生 神戸大講師

○近藤浩之 S 四十一年生 北海道大大学院助教

○渡邊明 S 二十七年生 長野県立高教諭

○小川涼 S 五十六年生 四国大研究生

○本橋章世 S 二十年生 大東文化大研究生

○新井聡子 S 五十六年生 大東文化大学院生

◆計報

○小名木康佑 千紫会会長、埼玉大学名誉教授

編集後記

◆最近山東省を再訪。当時は文物遺跡の保護が不徹底ながら、それはそれで魅力的でした。現在では保護政策に努力している印象。そして何よりも、書道に関する遺跡が高速道路で結ばれていたのには驚きました。十五年前、十日も道のり今では三日です。（小川博章）

◆来る正月七日から開催の「歌仙の饗宴展」、目下奮闘中です。出光所蔵品に加え、初公開の古筆群がずらり、は当たり前。佐竹本三十六歌仙絵コーナはこれまでない充実度で八点を展示。幻の断簡「斎宮女御」の公開は約十年ぶり。なんと二週間展示します。見逃したらあと十年後…。（笠嶋忠幸）

◆毎朝、わが家のベランダから「吉祥寺」の墓道を眺めている。八月中旬、第四十回記念官公書展記念行事「原本・肉筆、拓本と複製」を観た。古い本堂のころ、拝見したときより拓本の墨色が落ちていた様子。さて本堂は年をとったのかしら。（柿木原くみ）

◆今年は「古今和歌集」編纂の勅命が下って千百年。前期にこれを記念する展覧会・シンポジウムなど何件か開催。今後も目白押し故、展覧会情報から目が離せない。（高城）

◆夏休みに二週間の長旅に出た。毎年思っているが実現しなかったが、行ってみたい何とかなるものだ。ギリシャの小さな村でこの世の楽園を見た。彼らは日本の事など知らぬまま一生を終えるだろう。チマチマ生きている自分を反省する旅もあった。（杉）

◆趣味は、二十年前からウォーキング。最近その時間もなく、腹筋運動をはじめた。学生に「光陰矢の如し」の実感を話すことが多くなった。歳のせい？（鳳）